

「ラーニングライフ 第5回学生の学修に関する実態調査報告書」の結果に基づく対応について

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等	
総合科学部	1	授業がつまらなく感じる学生が一定数存在する。	(1) 全体的な授業の質を向上させる。 FDを行い、学期ごとの授業評価アンケートのフィードバックを行っている。特に、令和2年度は効果的な遠隔授業をピックアップしてFDを行い、教員間で情報を共有するとともにコロナ禍における授業設計を検討した。
	2	授業時間外学修が学年を経るごとに少なくなっていく。	(1) 1年生の段階から授業時間外学習時間を促す学修指導を行う。 1年生の担任教員に対して、授業時間外学修の促進を周知した。
	3	学年を経るごとに、国際教養コースを除く3コースにおいては語学学習の機会が少なくなり、語学の学修・能力の傾向が分化している可能性がある。	(1) 学部全体で上級生においても継続的に語学学習を進める体制を構築する。 コースを問わず履修することができる英語授業(自由科目・卒業要件外)の増設を決定し、具体的な授業内容を検討している。図書館の多読リーダーを取り入れ、学生が自分のペースで継続的に取り組めるような授業設計を行う予定である。
医学部医学科	1	受動的な学修姿勢が見受けられ、問題解決力や自己決定型学習の能力が身につけていない。	(1) 情報科学入門や医療基盤教育科目を中心に、1年次の教育内容や方法を見直し、SIH道場と連携してアクティブラーニングをさらに推進する。 2年次の基礎統合実習や3年次の医学研究実習の教育方法や内容を見直し、垂直統合・水平統合を進めるとともに、主体的な学修の推進をはかる。 2年次の基礎統合実習や3年次の医学研究実習の教育方法や内容の見直しを行った。
	2	英語教育について、現状では不十分と考えている学生が多い。	(1) 1年次の英語教育の見直し、3年次の医学研究実習と連携したreadingおよびwriting教育の充実、スーパー英語や語学マイレージプログラムの活用等により、6年間一貫した英語教育を構築する。 (2) 教養教育院兼務教員の役割を強化し、教養教育と専門教育の連携を推進する。 1年次の英語教育の見直しを行い、3年次の医学研究実習においてreadingおよびwriting教育の充実を図った。 教養教育院兼務教員が中心となり、医学科における英語教育の充実に取り組んだ。
医学部医科栄養学科	1	入学時から比べて外国語の運用能力について、「大きく増えた」「増えた」と回答した学生が3割未満であり、「変化なし」と回答した学生が4～5割と最も多かった。	(1) 令和2年度入学者より専門教育科目「栄養英語」を必修化し、栄養学における英語の基礎学修や国際的に活躍する人材の育成を図る。 実質的に令和3年度より必修となる専門教育科目「栄養英語」に向けて左記の通り実行している。
	2	3年生への調査結果について、大学(学部)卒業後の進路について踏まえた上で大学在学中に経験したいことについて、就職意識の形成につながる教育や企業での体験学習を踏まえた経験、課題解決能力の訓練などの設問に対して7割以上の学生が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答しており、自身の進路への関心・意欲が高い。	(1) 4年次での分野配属や、教職員及び先輩との学生意見交換会を通して、就職や進学についてのサポートを行う。 左記の通り実行している。
	3	前回に引き続き回収率が高かった(84.3%)、アンケート結果は全体を反映しているものと推察される。	(1) 引き続き高い回収率を維持する。 左記の通り実行している。
医学部保健学科	1	授業時間外の学修(授業課題や準備学習・復習)にかかる時間が不足している。一方で、現在の自分の学修時間や学修態度に満足していない学生が少なくない。また、シラバスを毎週または気になったときに確認している学生は5～6割のみである。	(1) 意欲を高める適切な指導により自発的な学修が可能であると読み取れる。毎回の授業の予習・復習や自学自習の指示などを具体的にシラバスに明示して、初回の授業などで説明する。 毎回の授業の予習・復習や自学自習の具体的な指示などをシラバスに記載すること、来年度の初回の授業で授業時間外の学修について説明することをシラバスの作成作業期間に授業担当教員に伝え、確実な実施を促した。
	2	「将来の見通しを持ち、何をすべきかわかっている」と答えた3年次学生は7～8割で、他の学部・学科と比べて割合が高い特徴を持つ。	(1) 幅広い学修の促進を目的として、専門性を志した学修方法を冊子「学修の手引」やSIH道場の教育プログラム等を通して入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導している。学修計画に沿った学修ができるよう継続的に指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が現れている。引き続き、取り組みを推進する。 冊子「学修の手引」を最新の内容に改定する作業を実施し、継続して、幅広い学修の促進に係る取り組みを推進する。
	3	授業内容の理解促進につながった授業方法として「課題演習」を挙げた学生が最も多い。次いで、各専攻に共通に「グループワーク」「振り返り」「質疑応答」、看護学専攻では特徴的に「ディスカッション」が高い割合になっている。	(1) アクティブ型授業を導入することで理解度を高める効果があることを明確に示しており、能動的な学修の推進を図る。 引き続き、能動的な学修の推進を図る。
	4	SIH道場で学んだ内容のうち、在学中の学修に役立っている項目は、看護学専攻では「文章の書き方」、放射線技術科学専攻では「専門分野の体験学習」、検査技術科学専攻では「専門分野の体験学習」「文章の書き方」「プレゼンテーションの仕方」が最も多く役立ったと回答している。	(1) 期待通りの項目が挙げられている。SIH道場で実施している取り組みについては在学中だけではなく卒業後調査を通じた効果の検証も必要であろう。 卒業後調査に先行し、今年度に卒業予定の一部の学生に対して、取り組みが卒業後に役立つかをどうかを尋ねるアンケートを実施した。有益な意見が得られ、集計結果を教育プログラム評価委員会にて検討して改善に活用することとした。
歯学部	1	「授業時間外に、授業課題や準備学習・復習をする」に対する回答で、1日平均30分に満たない学生が半数以上を占めている。	(1) 講義時に小テストを設けるなど、準備学習・復習が必要な課題を与える。 アクティブラーニングの充実を図る。 コロナ感染の影響で、多くの科目がオンラインになったがその中で、小テストやレポートが課されることも多く、その提出のために自学の時間を増やさざるを得ない状況になっていた。また、一部学生はコンテンツを繰り返し見るといふこともあり、これは自学ではないかと思われる。口腔保健学科では、ライブで討論等が行われており、その準備の時間を必要とした。 オンデマンド・オンラインの講義が多かったため、自らが予定をたてて行動する必要があり、それが意味あるアクティブな学び方になっていくと考えられる。実際にオンデマンドであると、自らがそれを視聴しにくいと、講義は受けられず、そのような学生の対応も必要である。一部の講義では、提出されたレポートにコメントがつけられて返却されており、これがポートフォリオの役割を果たしていた。
	2	「大学教員と顔見知りになる」では3年次に高い値を示しており、「あなたの学生生活は充実していますか」でも高い値である。そして尚「大学教育全体の満足度」に評点を付けた場合「60点以上」とした割合は、[1年次:歯学科 86%・口腔保健学科 93%、3年次:歯学科 82%・口腔保健学科 93%]と高値である。	(1) 担任制度、メンター制度を引き続き活用し、学生とのコミュニケーションをとる。 今年度は、対面の講義・実習が行えない時間も多かった。そのため歯学科では、各学年の学生と学部長・教務委員長・臨床実習責任者が、オンライン懇談会をもち、学生の不安や要望の聞き取り等を行った。その中で、6年生の国家試験対策の講義などを設定することができた。この先は、学年担任・メンターが、このようなオンライン懇談会を行うようなことを検討してもよいと思われる。口腔保健学科では、15名と定員が少ないこともあり、オンラインライブの講義で学生と十分にコミュニケーションが取れていた。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
薬学部	1	1年次生において、「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」機会、「定期的に小テストやレポートが課される」機会が頻繁にあったと回答している学生の割合が他学部比べて高い。また、学科別では、薬学科では「授業中に学生同士が議論する」、創製薬科学科では「授業で検討するテーマを学生が設定する」機会が頻繁との回答率が高かった。	(1) 引き続き、当該授業科目への興味を引き出し、理解を深めるための工夫を行った上で授業を実施する。	FD研修会において、当該授業科目への興味を引き出し、理解を深めるための工夫について情報共有を図ることとしている。
		(2) 初年次教育にとどまらず、可能な限り上級学年においても「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」機会を増やすように努める。	FD研修会において、可能な限り上級学年においても「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」機会を増やすよう周知する。	
	2	履修登録（1年次生）について、「取りたい授業を履修登録できなかった」と回答した学生が非常に多かった。	(1) 令和3年度入学者からのカリキュラム設計にあたり、時間割枠や履修単位数等の見直しを行い改善を図る。	関係委員会において、カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに基づき、カリキュラム編成について検討を行い、令和3年度入学者からのカリキュラムを構築した。
	3	授業時間外の学修時間が少ない。	(1) 当該授業に係る課題を与えたり、小テスト等の実施により、授業の予習・復習を促すような仕掛けをする。	引き続き、授業担当教員において、当該授業の内容について理解度を深めるための具体的な仕掛けづくりを行うこととしている。
(2) 研究室配属後の学生においては、自分の興味のある探究や卒業研究につながる実験・調査のための時間を確保できるよう配慮する。		FD研修会において、研究室配属後の学生への対応（自分の興味のある探究や卒業研究につながる実験・調査のための時間を確保できるような配慮）について検討することとしている。		
4	薬学科1年次生において、「授業内容の水準をもっと易くすべき」と答えた学生が22%で、これは全学部の中で最も高い比率（全学平均13%）となっている。	(1) 引き続き、関係委員会において、成績評価の分布状況の確認・検証、学生の成績評価結果の状況を学期ごとに分析し、成績下位の学生に対して、学修改善につながる対応を検討・実施していく必要がある。	関係委員会において、成績評価の分布状況の確認・検証、学生の成績評価結果の状況を学期ごとに分析を行った。今後、成績下位の学生への働きかけとして、具体的な目標設定をする等の対応策を関係WGにて検討予定である。	
理工学部	1	理工学部ではアドバイザー制度や担任制度により学生の学修をサポートする取り組みを行っていますが、学生は必ずしも教員を身近に感じてはならないようです（設問32, 33, 37, 82, 93, 114）	(1) 担任による学生面談を着実に実施し、一層コミュニケーションを深められるように努力します。また、講義では親近感を生まれにくいため、演習・実験に多くの教員が関わられるように再検討します。なお、アドバイザー制度は最近導入されたので良否は判断するには早いのですが、担任制に比べて一人の教員が少ない人数の学生を受け持つため、相談しやすい環境が作れると考えています。引き続き、担任制、アドバイザー制度を並行して実施していきます。	クラス担任制、アドバイザー制度を着実に実施し、定期的に学生との面談をしています。
	2	e-learningに関する調査（設問121-123）において、「本学のe-learningサービスが学習に役立つか」という問いにはおよそ半数が肯定的な意見で、「オンライン学修科目を今後も増やした方がよいと思うか」という問いにはおよそ4割程度が肯定的な意見でした。オンライン学修の本格的導入に向けてはさらに満足度を向上させる必要があります。本調査は昨年度のもですが、今年度の状況もさほどかわらないでしょう。今年度はコロナ禍のため、強制的に多くの授業がオンラインになっています。オンライン授業の実施方法を工夫し、より肯定的な評価になるように改善する必要があると考えています。	(1) 別途、オンライン授業に関するアンケート調査も実施しており、それを踏まえて授業改善を実施していきます。また、本学ではeラーニング配信用講義自動収録システムの整備を進めており、オンラインコンテンツの質の向上に取り組んでいます。	オンライン授業に関するアンケート調査について、教員内で共有し、授業改善に取り組んでいます。
	3	学生には、大学で専門性を高めるとともに、視野を広げ、社会における多様な問題を解決する能力を養ってもらいたいと考えています。専門的な知識の向上に対する満足度は高く（設問44）評価できますが、他分野の知識や交流が必ずしも十分ではないようです（設問46, 50, 51, 52, 60）	(1) 理工学部では1年次のSTEM概論のように分野を超えた科目を準備していますし、他コースの専門科目の履修を義務付けており、他分野の知識の獲得を促しています。アンケート結果はそれが十分ではないことを示していますが、専門科目とのバランスもあり、カリキュラム自体の改定は難しいかもしれません。しかしながら、既存科目の内容を見直すなどして、少しでも学生の視野を広げられるように検討していきます。	引き続き、分野を超えた知識や交流が促せるように、STEM概論や他コース履修を適切に実施していきます。
産生物学部	1	1年生では、体験的に学ぶ機会が多くあり、授業時間外に、授業に関連しない勉強をする学生も多く、視野が広がる授業提供ができています（質問4や36）。	(1) 新型コロナウイルスの影響で、多様な学修の機会が少なくなると考えられるが、工夫して維持に努める。	コロナ禍でのフィールド実習では、常三島キャンパス内へ資材や機器類を運びこみ、少人数に分けて時間をずらしながら実施することで、現場体験をしてもらった。また、会議システムのある附属施設をスタジオとして使い、学外からゲストを招いてトークショー形式で体験談を語っていただく等で多様な学習機会を担保している。
	2	3年生では、教員とのコミュニケーションがやや不足していることがうかがえる（質問10や33）。	(1) manaba等の学生・教員間の学習成果について確認できる学内システムの利活用を促進する。また、学部講義等を整備し、専門教育を集中して学生と教員が触れ合う機会を増やせるように、ハード整備を要求して行く。	リモート授業によりmanaba等の学内システムの利活用が常態化された。しかしながら、対面授業が可能となっても、他学部優先して使える講義室を持たないため、三密を避ける教室確保ができない状況であり、ハード整備を要求し続けている。
	3	高校で履修していない数学、物理、化学、生物の学習は、教養教育で開講されている高大接続科目や自然科学入門又はその他の科目への依存度が高かった（質問68）。	(1) それらが履修し続けられるように、カリキュラムを改善し、特に学部の基礎科目としている化学については教育内容を再検討する。	これらに対応できるようにカリキュラムの改善が検討されており、次年度入学生から適用される。

部局	調査結果から読み取れる事項とその対応計画		対応計画実行の進捗状況等	
	事項（問題点・優れた点等）	対応計画等		
教養教育院	1	教養教育への満足度について 教養教育に関わる選択肢「人生を支える幅広い教養」を選んだものは1年生全体で47%、3年生全体で54%であり、3年前の調査では35%、6年前の調査では37%であったことから、10%～20%程度上昇した。 教養教育の満足度についての間88において「とても満足」と「満足」を合わせると、1年全体で49%、3年全体で50%程度と問62の教養教育に関わる選択肢を選んだ割合とほぼ同じことから、ほぼ半数の学生が教養教育の意義を認め、また満足しているようである。	(1) 「人生を支える幅広い教養」の数値上昇は、平成28年度の教養教育設置による効果である可能性が示唆されるが、毎年の時間割編成にあたり、科目数の確保とともに、新規開講科目の充実を図ることとする。 (2) 教養教育に対する満足度は、その提供されている内容および選択の幅によって決まる期待値に対しての結果と解釈している。これまでは8科目群のなかで学生が自由に選択できる授業を置いているのは、5科目群である。令和3年度から4科目群に移行することで、学生が授業を選択する目安をわかりやすくするとともに、その目指す方向を科目群と科目の構成の中に落とし込むことで満足度の向上を図ることとしている。	令和3年度において、42の授業の新設及び48の授業の削減となる。削減数が新設を上回る理由は、カリキュラムやクラス編成の見直しに伴う削減が15授業含まれているためであり、科目数の確保と、新規開講科目の充実を図ることができた。 教養教育は3つの目標を定めて授業を提供している。令和3年度入学生より、教養教育の3つの目標に対応して、4科目群を提供することになった。学生が授業を選択する目安をわかりやすくするために、令和3年入学生より各学部の履修要件を変更し、それぞれの科目群の中から必要な科目を選択し履修できるようにした。
		2	(1) 適正な授業選択が行われるように、授業の配置及び学生への授業の提示を行う。 適正な授業選択のための授業の配置を検討することを目的に、教員FD「学生のつもりになって授業選択してみよう」を各学部・学科と共同で開催し、学生と同じ条件でシラバスを参考に授業教育科目の時間割を作成する。時間割作成過程で構造的、履修要件の問題点などを検討する。 これまで医学部医学科、歯学部、薬学部、生物資源産業学部とFD開催したが、今後は理工学部、総合科学部とも開催、さらに履修要件の改正を行った学部とも開催予定である。 (2) 適正な授業選択のための授業の学生への提示について、シラバスの記載漏れのチェックを毎年行っている。特に本年度のように授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知を行うようとする。	適正な授業選択のための授業の配置を検討することを目的に、学生と同じ条件でシラバスを参考に授業教育科目の時間割を作成する。時間割作成過程で構造的、履修要件の問題点などを検討する。さらに履修要件の改正を行った学部とも開催予定である。 また、成績のクラス間格差が生じていることも「単位の取りやすさ」と関連していると考え、クラス間格差を是正するために、クラス間格差の生じている授業科目の担当教員へのインタビューを行い、問題点の抽出、共有を行った。 適正な授業選択のための授業の学生への提示について、シラバスの記載漏れのチェックを前期・後期で行った。特に令和2年度のように授業形態、評価方法の変更があった場合は、速やかにシラバスの変更と学生への周知をmanabaや教務システムなどを用いて行うように周知した。
	3	(1) 令和2年度の入学前学習は、それまでの「物理学、化学、生物学、英語」に加え「情報」を新しく加えた。令和3年度は、さらに「数学、レポートの書き方」を加えて、入学前学習を充実させる。また令和3年度からリメディアル科目の「高大接続科目」と「自然科学入門」を一体化し「高大接続科目」とすることで、学生に対しリメディアル科目をわかりやすくする。 (2) 高校復習テストで成績が不振な学生に対しては、リメディアル科目の履修を勧めるよう各学部の教務委員会へ連絡をしているが、卒業要件ではない学部からの受講生は多くない。リメディアル科目の履修を促すため、生物資源産業学部では、リメディアル科目の単位を、令和3年度から教養科目群の「自然と技術」の単位へ振り替える予定としている。	令和3年度は入学前学習として、「数学」と「レポートの書き方」を新設した。入学前学習の履修は学部・学科により異なるが、新しい科目を加えたことでより充実した入学前学習の効果が期待できる。 また令和3年度から、「高大接続科目（物理学、化学、生物学）」と「自然科学入門（数学）」を、いずれもリメディアル科目という性質から一体化して、基礎科目群の「高大接続科目」とした。これにより、学生に対してリメディアル科目がわかりやすくなることが期待される。 医学部医学科及び歯学部歯学科は、現在大学入学センター試験で選択しなかった理科目を、リメディアル科目の必修科目としている。令和3年度より、生物資源産業学部及び薬学部がリメディアル科目の単位を、教養科目群の「自然と技術」の単位へ振り替え可能とした。これによりリメディアル科目の受講が増加することが期待される。	
	4	(1) 英語に限らず語学の運用能力を向上させるためには、自ら積極的に関わる学習時間の確保が必須である。徳島大学語学マイルージプログラムにおいては、継続する学習時間を確保するためにマイルージポイントをためるということを通じての時間確保を行っている。そうした効果は学年の進行によりTOEIC等の学習時間の増加の傾向はみられるものの、それ以外の効果は大きくない。語学教育センターワークショップを2020年度はオンラインで提供しているが、その内容の充実および受講者数の増加を通じて学生の語学力の向上を図ることとしている。 (2) 令和2年度は新型コロナウイルス感染対策として遠隔授業が一気に増大した。遠隔授業は語学学習にとつてどのような効果があるかということについて授業評価アンケート等を通じて調査するとともに、学生の語学力向上に好ましい授業スタイルの事例があるのであれば、その共有を図ることとする。	2020年度はコロナ禍が後期になっても続いたため、語学教育センターワークショップは年度を通じてオンラインのみでの提供となった。そこで内容の充実や今後の受講者数の増加を今後可能にするために、今年度は学生の意見を取り入れたワークショップを実施することとした。教育について考え提案する学生・教職員専門委員会において学生委員から英語学習に関するワークショップの活性化に関する提案があったことから、学生委員の提案を教養教育院プログラム評価委員会において検討したうえで、学生提案を実現した。この経験は事後に教養教育院教員とFD企画により共有し、今後のワークショップの企画に生かすこととした。 授業評価アンケートの中から、語学教育における遠隔授業が語学力に好ましい事例として次の点が読み取れた。 ・ホワイトボード機能、グループに分かれるなどの遠隔ツールの機能を活用することで、対面よりも快適な環境が提供される可能性が示唆された。 ・オンデマンドの教材が提供されることで、学習者のペースで学習を進めることが可能となる。 ・教員がインタラクティブな対応をすることで、個々の学生へのフィードバックは対面授業と同様に担保される。 そうした事例をFDを通じて共有していくこととしている。	